

## The Yearsにおける再生のパターン

西元, 宜子

<https://doi.org/10.15017/2332657>

---

出版情報 : 文學研究. 80, pp.15-34, 1983-02-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# *The Years* における再生のパターン

西 元 宜 子

## I

Virginia Woolf の日記に依れば、*The Years* は最初 novel-essay として書き始められた<sup>1)</sup>。性、教育、人生など何もかも取り込み、1880年から1930年代まで力強く描くつもりであると記されている。この時点では、Woolf はこの novel-essay を *The Pargiters* と呼んでおり、1978年にその原稿が出版されて概要が明らかになった<sup>2)</sup>。しかし、novel-essay として書かれたのは1880年の部分だけで、やがてこの試みは放棄された。その理由としては、語りの方法としてあまりに煩わしいものであり<sup>3)</sup>、描写の喚起力を損いイメージを乏しくする<sup>4)</sup> という構造上の欠陥があったことが挙げられよう。そしてもちろん、小説がプロパガンダになることを極度に嫌う Woolf にとって、novel-essay の危険性は大きすぎたのである。

従来、小説として発展した *The Years* と、プロパガンダとして発表された *Three Guineas* を対と見做す見方が多かった。*The Years* の再評価のために1975年12月に行われた Modern Language Association の研究会でも、*The Years* と *Three Guineas* を関連づけている発表があった<sup>5)</sup>。しかし、Woolf は1932年11月に *The Years* の構想を思いつき1936年の末に校正を終えるまで4年に亙る長い歳月を費したが、*Three Guineas* の原型に言及したのは、1935年2月が初めてである<sup>6)</sup>。この4年もの間、*Flush* をはさみながらも、Woolf はひたすら膨大な量の小説を書くことに専心したのである。

But *The Pargiters*. I think this will be a terrific affair. I must be bold and adventurous. I want to give the whole of the present

society—nothing less: facts as well as the vision. And to combine them both. I mean, *The Waves* going on simultaneously with *Night and Day*. Is this possible?<sup>9)</sup>

普通の忙しい日常生活が続いて行く感じで、しかも歴史、政治、フェミニズム、芸術、文学等、作者の知っていること、感じることのすべてを盛り込もうとした時に、作者が心を砕いたのはいろいろな場面を圧縮することと、リズムを保つことであった<sup>9)</sup>。小論では、*The Years* の構成において、内容を圧縮しリズムを保ちたいという作者の意図がどう反映されているかを中心に分析していきたい。合わせて、50歳代になり、全く自由に、まっすぐに逸れることなく書くことができ、しかもちょうどバランスがとれているという感じを持てるようになったという作者が<sup>9)</sup>、これまでの一貫したテーマである人生、時についてのどのような境地に達したかを探ってみたい。

## II

*The Years* は、1880年、1891年、1907年、1908年、1910年、1911年、1913年、1914年、1917年、1918年、1930年代の Present Day と年代を明記された11の章から構成されている。最も長い Present Day は全体の約3分の1を占め、次に長いのは1880年で全体の約5分の1の分量である。こうした方法について、伝統的手法への後退だとする意見もあるが<sup>10)</sup>、年代は、各章の前書の季節や天気はその章の雰囲気を示すように、単にその場面の時代的背景を暗示するに止まる。各章の内では、それぞれある一日の出来事を描いており、*Mrs Dalloway* の手法に近い。また各章の選び方やつながり方については、何ら必然性は見い出されず、その間の経過についてもほとんど触れられていない点は、*Jacob's Room* の延長線上にあると言ってよい。人間の意識と事実を織り交ぜ、作者が人間の心の内と外のつながりとリアリティーを辛抱強く追求し、一層の真実味と力強さをもって表現しようとした新しい試みだと言える<sup>11)</sup>。

時代は、ヴィクトリア朝から第一次世界大戦の空襲下の恐怖と終戦の喜び、

そして再びファシストの台頭により不安定な事態を迎えた世界情勢へと動いていく。歴史的イベントとしては、アイルランドの指導者 Parnell の死、Edward 7 世の死などが新聞記事や人々の噂として知らされるだけである。Colonel Pargiter, Mrs Rose Pargiter と Eleanor, Edward, Morris, Milly, Delia, Martin, Rose の 7 人の子供たちの家族、Colonel の弟 Sir Digby Pargiter, 妻の Eugénie, 娘の Maggie と Sara の家族、Mrs Rose Pargiter の従姉の Malone 夫妻と Kitty の家族、それに Morris の子供の North と Peggy が主な登場人物である。3 家族の 3 代に亙る年月の間には、教育、就職、結婚、誕生と死など人生の大きな節目となる出来事の数限りなくあったはずであるが、ほとんど結果として知らされるに止まる。社会的にも個人的にも劇的事件を対象にしていないこともあろうが、作者の最初の意気込みに反して、事実が希薄な感じがすることは否めない。

唯一つの例外は、1880年の Mrs Pargiter の死の場面である。涙にくれる Milly と対照的に、母の死によって自由になれる喜びを隠すのに懸命な Delia, やはり妻の死を望んでいながらも実際にその時が来ると神秘的な面持の Colonel Pargiter と様々な表情を克明に描いている。これは、道徳によって縛られ、社会が腐敗し、家庭生活にまで欲求不満と抑圧が渦巻いていたヴィクトリア朝の雰囲気伝えるのに効果的であると作者が判断したからであろう。また、この場面を思いついた背景には、Woolf の母が死んだ時、当時13歳だった彼女が自分は充分感じないのではないかと恐れた記憶があった<sup>12)</sup>。

その他は、登場人物たちの互いの訪問、偶然の出会い、パーティーなどを織り込みながら、普通の日々の普通の心を半世紀に亙って描いている。リズムを保ち構成を緊密にするために Woolf がとった方法は、繰り返しの手法である。*The Waves* でも “Jinny kissed Louis,” “Percival died from a fall from his horse in India” などが繰り返されるが、*The Years* では、繰り返しはもっと深い意味を持ち発展的である<sup>13)</sup>。

まず、同じ言葉、同じ動作が別の人々によって繰り返されるのが特徴であ

る。1880年、死に向って一進一退を繰り返している Mrs Pargiter は眠りから醒める。

“Where am I?” she cried. She was frightened and bewildered, as she often was on waking. She raised her hand; she seemed to appeal for help. “Where am I?” she repeated. For a moment Delia was bewildered too. Where was she? (p.23)<sup>14)</sup>

Mrs Pargiter の不安は Delia に受け継がれる。さらに、Present Day の Delia のパーティーの只中で居眠りをする Eleanor に繋がる。“She half opened her eyes. But where was she? In what room?” (p.460) 眠っている時の Eleanor の顔は Milly に似ており家族の類似性を示すと共に、死人の安らかさを思い起こさせ死期がそう遠くないことを知らせる。居眠りという点では、1914年に Martin といっしょに Maggie に会いに出かけたハイド・パークで木にもたれて眠る Sara, 1917年に Maggie 家で食後まどろむ Sara, Present Day の Delia のパーティーに着くや否やあくびをしながら “I want to sleep” (p.394) と言い、Nicholas に “She lives in dreams” (p.399) とからかわれる Sara と結びつく。

一方、Peggy は Delia のパーティーで Uncle Patrick と話しながら、手で窪みを作る。

I'm good, she thought, at fact-collecting. But what makes up a person—, (she hollowed her hand), the circumference,—no, I'm not good at that. (p.380)

この仕草は、Eleanor にも見い出される。

We know nothing, even about ourselves. We're only just beginning, she thought, to understand, here and there. She hollowed her hands in her lap, just as Rose had hollowed hers round her ears. She held her hands hollowed .... (p.461)

いずれの場合も、真実を掴もうという姿勢が自然に動作となって現われたもの

である。自分自身のことさえわからないという Eleanor の言葉は、また North のつぶやきでもある。

There was the glass in his hand; in his mind a sentence. And he wanted to make other sentences. But how can I, he thought ... unless I know what's solid, what's true; in my life, in other people's lives? (p. 443)

“repeat” という語そのものも頻出する。人の言った言葉、自分の言いかけた言葉を繰り返す。日常会話に一般的に見られる現象であり、コミュニケーションの難しさを示している。例えば、Nicholas はスピーチをしようとするが、1917年の空襲時の地下室でも、Present Day の Delia のパーティーでも、横槍が入って中断してしまったり、同じ言葉を繰り返したりでなかなか先に進まない。

その他、繰り返しによって効果をあげているものに食事の場面がある。食事はその内容によって生活のレヴェルと変化を如実に表わすからである<sup>19)</sup>。1880年のアバコン・テラスでは、念入りに磨かれたナイフとフォーク、彫刻を施した椅子、油絵、マントルピースに飾られた短剣、りっぱな食器棚のある食堂に盛装した Colonel Pargiter と娘たち息子たちが入って来る。気難しい Colonel でさえ上気嫌になるが、子供たちは一挙手一投足にも父親の気嫌をうかがいながら重苦しい空気が流れる。ヴィクトリア朝の安定した中産上流階級の生活の一コマである。同じ日 Kitty は、晩餐会の後学者たちの談笑の中におり、オックスフォードの知的階級の雰囲気をあますところなく伝えている。

1910年に Maggie と Sara が Rose を食事に招くハイマス・プレイスの部屋は、カーペットさえなく、窓の下からは物売りの声が聞こえる下町にある。1907年に Digby 夫妻が相次いで死んで以来の彼女たちの生活の下降ぶりを物語っている。一方、1911年の Morris の晩餐会は、父親が亡くなり自由になった Eleanor と、North, Peggy の二人の子供たちも登場して、順調で幸福な生活を示している。Woolf が *Mr Bennett and Mrs Brown* の中で、1910年

頃に人間の性格が変わったと主張していることと、古い世代の老化と新しい世代の台頭という世代の交代を関連づけることも可能であろう<sup>16)</sup>。Peggy はやがて医者になり、女性としてヴィクトリア朝には考えもつかなかった活躍をするのである。1914年には、Lady Lasswade となった Kitty の上流社会での生活ぶりが知らされる。

第一次世界大戦中の1917年では、食事の最中に空襲が始まり各自食器をかかえて地下室に避難する有様で、民衆の不安や社会の愚かさと暴力に犠牲を強いられている姿が照らし出される。Present Day で Delia のパーティーに出かける前、Sara と North は血の滲み出た肉と腐りかけた果物で食事をする。この食卓は、Sara の貧しさを示すと共に、残酷で腐敗した社会を暗に批判している。Delia の家でのパーティーは一族再会である。しかし、事務室が俄にクロークになるなど、1880年とは大分趣は変わってしまった。

しかしながら、年月がたっても変わらないものも、Woolf は巧妙に織り込んでいる。例えば、1910年に Eleanor と仲間たちの集会に出席した Kitty は、オペラに行くため自分が場違いに着飾っていることにひきめを感じて、“But can't I give anyone a lift?... What about you, Eleanor?” (p. 193) と言う。再び Present Day で “Can't I give you a lift back, Nell?” (p. 467) と繰り返す。Kitty の心情や立場は変わっていても、同じような言葉の繰り返しは若かりし頃の Kitty を思い出させ、彼女の過ごしてきた年月に目を向けさせるのである。また、60歳位になった Rose を見て、Martin は “Isn't she the very spit and image ... of old Uncle Pargiter of Pargiter's Horse?” (p. 449) と言う。さらに、Kitty は Rose の人生を振り返って、“Rose had the courage of her convictions. Rose went to prison.” (p. 453) と評する。婦人参政権獲得運動の活動家<sup>17)</sup>であった Rose の激しい性格は、小さい子供の頃からであった。日が暮れてから Eleanor の目を盗んで Lamley の店にアヒルのおもちゃを買いに一人で出かけた Rose は、“I am Pargiter of Pargiter's Horse ... riding to the rescue!” (p. 27) と叫びながら勢いよ

く駆けて行く。途中で変質者に襲われそうになり、非常に恐怖を感じるが、言いつけにそむいてのことであるし、本能的に感じる性に対する罪の意識から誰にも話せずじまいになる。無邪気に見える子供も、話して助けを求めたくても話せない苦しみを持っているのである。

その他にも、時代の変遷を経ても変化しないものがあることを、Woolf は様々なイメージや小道具を使って伝えようとしている。Martin が Mrs Pargiter の誕生日に贈ったせいうちの置物は、まず1880年にアバコーン・テラスの書き物机の上で見出される。アバコーン・テラスが Colonel の死後売り払われてヴィクトリア朝の遺物と決別した後も、家政婦の Crosby に Pargiter 家の思い出として保存される。人々から忘れられても物は存在を続けることを示す。ここで注目すべきことは、Eleanor が物質より人間の感情の方が残ると感じていることである。これには自分の肉体が減びることへの恐れが潜在的に働いているように思われる。

She [Eleanor] shut her hands on the coins she was holding, and again she was suffused with a feeling of happiness. Was it because this had survived—this keen sensation (she was waking up) and the other thing, the solid object—she saw an ink-corroded walrus—had vanished? (p. 460)

このコインは、Eleanor がタクシー代の自分の分だとして Peggy に渡そうとしたが受け取ってもらえなかったもので、Eleanor の自己主張、自己の核を表わしている。

アバコーン・テラスに掛かっていた Mrs Pargiter の若かりし頃の肖像画は、自分の死の瞬間も冷たく微笑んでいたが、死後30年近くたつと、肖像であることをやめてほこりをかぶった単なる絵にすぎなくなる。それでも、さらに歳月が過ぎて Eleanor と Peggy が眺めた時、Eleanor は懐しみ、Mrs Pargiter に似ていると言われたことのある孫の Peggy は、興味と気恥ずかしさの混った気持で見つめる。この肖像画は一族の目に見えない絆を感じさせ

る物の一つと言えよう。また、Digby 家のホールに置いてあった金の爪のついた大きな深紅色の椅子は、Sara の安アパートに落ち着き、部屋を訪ねて来た Rose に安心感を与える。この仰々しい椅子は、華やかで形式ばったヴィクトリア朝の象徴でもある。つまり、ヴィクトリア朝の家長中心の家庭生活の標章でもあるのだ。椅子の爪は、“claw” と形容された Pargiter 家の家長 Colonel の指を 2 本失った手を連想させる<sup>18)</sup>。

男性が支配する社会に反発する姿をさりげなく、しかも印象的に表わしているのは、Kitty がきつすぎる靴を脱ぎ捨てる描写である。オックスフォードのロッジで少女期を過ごす Kitty は、好きな歴史の勉強もできないほどパーティーや来客の接待に忙殺される。作法についてもうるさく言われ、自由を求めている大柄な娘である。パーティーが終って自分の部屋に引き揚げた彼女が蹴って脱ぐ靴は、この息詰まる生活そのものでもあろう。Kitty は Lord Lasswade と結婚して念願のオックスフォード脱出を計った。しかし、1914 年、田舎に休養に行こうとしている彼女は、なかなか引き揚げないパーティーの客をやっと帰した後、汽車の時間を気にしながらきついしゅすの靴を蹴って脱ぐ。上流社会の社交も神経を疲れさせるのである。田舎に着いた Kitty は、やっと力が漲ってくるのを感じ幸福になれる。Rose のように政治運動に一生を捧げることはなくても、Kitty は彼女なりにはっきりとした考えと激しい気性を持っているのである。Present Day の Delia のパーティーの席では、靴のきつさを訴える Patrick に「蹴ってごらんさい」と言い、年をとっても変わらぬ性格と茶目気を見せている。

なかなか沸かない湯沸かしも繰り返し現われて、一家の思い出の中に残っているが、愛情が欠乏し抑圧された家庭生活を示すものだと言えよう<sup>19)</sup>。最初に登場するのは、Mrs Pargiter が死への一進一退を繰り返している日、Milly がヘアピンで芯を広げている場面である。Delia は早く母親が死ぬことを望み、Colonel はその重苦しい空気から逃げるために愛人の下で刹那の喜びを求める。模様のパラが消えかかっているのは、もちろん Rose という名の夫人の

命が消えかかっていることと呼応するものである。湯沸かしが次に登場するのは、Eleanor がヘアピンで灯芯をほぐしながら Martin と、相次いで亡くなった Eugénie と Digby のことを話している時である。死後3カ月も経たない内に家が売れたことに対する虚しさが二人の胸を占めている。燃えない火は、ここでも生命力の衰えと深い関係がある。

久しぶりにアバコーン・テラスを訪れて何も変わっていないと喜ぶ Martin だが、気を滅入らせる湯沸かしはいつも嫌っていた。彼は家について次のように言っている。

It was an abominable system, he thought; family life; Abercorn Terrace. No wonder the house would not let. It had one bathroom, and a basement; and there all those different people had lived, boxed up together, telling lies. (p. 239)

湯沸かしだけではなく、家全体の設備の悪さも、言いたいことを口に出せず、父親の顔色をうかがい、兄弟げんかの絶えなかった家庭が、安らぎの場としての機能を十分に果していないことの表われと感じている。「狭い所に押し込められている」という感じは、この作品の中で Eleanor, Morris, Sara 等様々な人によって体験される。

さらに、社会の中での閉じ込められた生活を象徴的に示すものとして、多くの批評家が *Antigone* を挙げている<sup>20)</sup>。Antigone は叔父の Creon 王に反抗したため狭い穴に生き埋めにされる悲劇の王女である。Woolf の日記には、“Reading *Antigone*. How powerful that spell is still—Greek, an emotion different from any other.”<sup>21)</sup> という記述がある。作者が Sophocles のギリシア悲劇を自分の作品の中に取り込んだのは、その紀元前400年あまり前から続いている作品の生命力を、自分の作品にも吹き込みたいという気持が働いたからであろうか。

オックスフォードで *Antigone* を読む Edward は、Antigone に自分の恋する Kitty を重ねる。Kitty もオックスフォードの男性社会にある意味で

生き埋めになっていると言うことができる。Edward はこれを英訳して従妹の Sara に贈る。Sara がこの本を初めて開くのは、1907年、娘盛りに達した彼女が、姉の Maggie と両親がパーティーに出かけた夜一人でベッドに横たわっている時である。彼女は眠ろうとするが、隣から聞こえるダンスの音楽で寝つけないでいる。夏の夜遅く、しかし世の中がまだ生き生きと楽しんでいる時に、Sara は自分が地中に埋め込まれた生木の根のように感じる。Sara はまさに、生き埋めのイメージそのものである。彼女は、赤ん坊の時にベッドから落ちたため片方の肩が少しばかり高く、人前では心を開くことができない。結婚はしないが最も仲が良く、長いつき合いをしている Nicholas は、Sara を評して夢の中に生きていけると言う。人の集まっている席でもよく眠るなど、自分だけの世界で生きていることが多い。眠りは彼女にとって、敵意のある社会から身を守る 防御物の 役目を果たしている<sup>22)</sup>。彼女が最も心を許している Nicholas は外国人であり、自意識があまりなく、同性に関心を示すなど自他共に認めるアウトサイダーである。

Nicholas は Pargiter 家の人々には迎え入れられており、特に Eleanor に親しみを感じる。Eleanor も彼と同席することを喜ぶ。彼女は Present Day の Delia のパーティーで Edward と話すうちに *Antigone* を思い出す。それを読んだ時、真実と美しさに感動したことを思い出すのである。Edward もうなづいて、ギリシア語でつぶやく。「憎み合うようにではなく、愛し合うように私たちは生まれてきたのです」(p. 446)。Eleanor の一生は様々な人のものであった。“My life's been other people's lives ... my father's; Morris's; my friends' lives; Nicholas's.” (p. 396) 母親を早く亡くしたため一家の主婦代わりとなって、気難しい父親の面倒を見て結婚することのなかった Eleanor は、一家の犠牲になったとも言える。Morris を兄弟の中で一番好み、子供の時はもちろん、Morris が結婚してからも彼と二人きりになれることを非常に喜んだ。Eleanor にしても、結婚したかもしれない男性はいた。しかし、Eleanor が自分の人生が彼らのものであったと思う時、犠牲になったという悔

しさではなく、分かち合った喜び、自分が彼らの一部であった喜びにまで高められている。Sophocles の *Antigone* も、自分の信念を貫いて兄を愛したことに満足して死んでいったにちがいない。

### III

作者は確かにヴィクトリア朝の社会を批判しているが、現代社会を肯定しているわけではない。また、各世代の善悪、優劣をつけることを目的にしているわけでもない。人生について、人間の本質について、過去・現在・未来の時の流れについて、各世代の人物たちが悩む様子を描いている。これらはいずれも Woolf の一貫したテーマであり、*The Years* は決して単に技巧を駆使してロンドンを描いただけの小説<sup>23)</sup>ではなく、作者の芸術と人生のすべてを注ぎ込んだ作品である。

作者は主に、Eleanor, North, Peggy, Martin, Rose, Kitty, Sara に視点を分散させて、客観的批評を可能にしている。しかしながら、最も大きな割合を占め印象的なのが Eleanor である。いつも自分が一番若いと感じていた Eleanor も、50歳になった1908年、老いに正面から向かわざるを得ない。

How terrible old age was, she thought; shearing off all one's faculties, one by one, but leaving something alive in the centre....

It was better to die, like Eugénie and Digby, in the prime of life with all one's faculties about one. (p.165)

ところが、1911年、Eleanor はすでに53歳になっているが、自分の人生は始まるころだと思う。しかしすぐ続いて、次のように思う。

Things can't go on for ever, she thought. Things pass, things change .... And where are we going? Where? Where? ...she mused; made an effort; turned round, and blew out the candle. Darkness reigned. (p.229)

Eleanor が自分は若く力が漲っているように感じて、すぐに自分の行きつく

所は死であるという動かしがたい事実が頭を覗かせる。しかし、ここでははっきりと言葉に出すのを避け、暗闇で暗示するに止めている。1917年、銃の音が遠ざかった後 Eleanor は生きていてうれしいと思う。ここでも彼女は、差し当たり爆死から免れたというだけで、死そのものからのがれたわけではないことを、口ごもりながら付け加えている。

それでも Eleanor は、Nicholas と来たるべき新しい時代のことを話しているうちに、再び “not only a new space of time, but new powers, something unknown within her” (p. 320) を感じ、自由な世界がやって来るだろうと述べる。Present Day のパーティーの席でも同じ感情が戻ってくる。

Her feeling of happiness returned to her, her unreasonable exaltation. It seemed to her that they were all young, with the future before them. Nothing was fixed; nothing was known; life was open and free before them.

... Isn't that why life's a perpetual—what shall I call it?—miracle? ... it's been a perpetual discovery, my life. A miracle. (pp. 412—13)

Eleanor は子供の生活とはこういうものだ、老人の生活とはこういうものだとして規定されることを嫌ってきた。彼女には毎日が発見の連続だという心の柔軟さがある。パーティーが終わりに近づいた頃、さらに理解に一步近づく。

There must be another life, here and now, she repeated. This is too short, too broken. We know nothing, even about ourselves. We're only just beginning, she thought, to understand, here and there. (p. 461)

生について考える際、時の流れについてどうしても考えざるをえない。

... she felt that she wanted to enclose the present moment; to make it stay; to fill it fuller and fuller, with the past, the present

and the future, until it shone, whole, bright, deep with under-standing. (pp. 461-62)

現在をとどめたいと願うことは、余生があまりないことを意識して、貴重な時間を大切にしたいということに他ならない。この時 Eleanor は両手であたかも今という時を包み込むようにしていたのだが、Edward に話しかけても彼が気付かずにいると、手を開きながらあきらめたように考える。

It must drop. It must fall. And then? she thought. For her too there would be the endless night; the endless dark. She looked ahead of her as though she saw opening in front of her a very long dark tunnel. (p. 462)

Eleanor はこの時 70歳を越えている。50歳の時よりも一層死が近づいてきたのを感じているにちがいない。しかし、暗い気持ちに落ち込んでいると、救いの光のようにだんだんと夜が明けてきて、朝の光がブラインドを白くしているのに気付く。このように、幸せで生命力に満ちた感じと死に対する恐怖感は、Eleanor の中で何度も繰り返し現われる。

一方、1914年、Eleanor より一つ年下の Kitty は、ロンドンから離れて田舎の空気を満喫する。

Spring was sad always, she thought; it brought back memories. All passes, all changes, she thought .... But she was in the prime of life; she was vigorous .... She was happy, completely. Time had ceased. (pp. 299-300)

幸せな気持ちを一瞬に凝固させ、時間が経っても変わらない時にしたいという願いが読みとれる。また、Present Day のパーティーの席でも、70歳を越し、殊の外現在と未来が欲しいと思うのである。しかし、Kitty は年をとったことを喜んでいる。というのは、若い時のように人が言うことを気にしないでいられるからだというのだ。こんな境地に達しながらもう一度生きられないのは残念だと思うのである。かつての闘士 Rose も、肥って耳が遠くなってパーテ

ィーに現われるが、とてもおもしろい世の中に住んで生活を楽しんでいるので長生きしたいと公言してはばからない。

若い世代は人生をどのように捉えているだろうか。パーティーの最中、もう遅いから帰ろうと誘う Peggy に、Eleanor は “But we’re enjoying ourselves . . . . Come and enjoy yourself too.” (p. 414) と言う。しかし、Peggy は “Enjoy the moment—but could one?” (p. 414) と懐疑的である。より幸福により自由になったという Eleanor に対しても、「幸福」とか「自由」とかという言葉で何を意味しているのだろうと考え込まざるを得ない。女医だから人間のことは何でも知っていると思って質問してくる Eleanor に、医者は体のことについては少ししかわからないし、心のことについては全く何も知らないと答える。そばで聞いていた Peggy の兄弟の North も医者はすべてん師だと口を揃え、Eleanor をがっかりさせる。もちろん North の言葉には幼い頃からの兄弟げんかの続きといった要素もあるが、Peggy と同じように科学の発達を全面的に信頼できないという事実には変わりはない。Peggy は、こんなに不幸が多いのにこの世界に生きていて幸せだという Eleanor に同意できない。

But how can one be “happy”? she asked herself, in a world bursting with misery. On every placard at every street corner was Death; or worse—tyranny; brutality; torture; the fall of civilisation; the end of freedom. We here, she thought, are only sheltering under a leaf, which will be destroyed. (pp. 418-19)

まだ 37~8 歳の Peggy にとって死はそれほど現実として感じられないが、社会の暴力に自由を奪われることを恐れている。

North はパーティーの人ごみの中で自分がアウトサイダーであると感じ、かつてないほどの孤独を感じる。人はみな笑われることを恐れているため本当に言いたいことが言えない。したがって、心が自由になれるのは沈黙と孤独の中だけだと考える反面、沈黙と孤独ほどつらいものはないとも思う。彼はグラ

スの中の泡を見つめながら、Eleanor や Edward たちの世代は自分の時代というものを持っていたが、自分たちの世代にはなく、泉から噴き上げる噴水のようなものだと思う。政治は信用できないし、宗教は死んでしまった現在、どこにも身を落ち着けるところがない。何が堅固で何が真実かわからないのだから、自分の人生についても他の人生についても何が言えるだろうかと迷う。

Peggy も、Eleanor と二人で Delia の家に向う途中で、孤独を感じる。

They were two living people, driving across London; two sparks of life enclosed in two separate bodies; and those sparks of life enclosed in two separate bodies are at this moment, she thought, driving past a picture palace. But what is this moment; and what are we? The puzzle was too difficult for her to solve it. She sighed. (p.360)

人間について、時の流れについて理解できず、自分の考えを持てずに悩んでいる姿がここにある。女性は教育が受けられず家に閉じ込められ、結婚が唯一の家族から離れる方法だったヴィクトリア朝に比べると、医者になれるだけの教育を受けられるほど社会は発展した。しかし、Peggy はより自由により幸せになったとは思えないのである。逆に、Eleanor の過去はとても平和で安全だったように見えるのである。

#### IV

時間や死と共に人生の大事な要素である相互理解と愛について、Woolf ほどのような見解を示しているだろうか。一族の名前 Pargiter について Leaska は、“parget” とは “to plaster with cement or mortar, esp. to plaster the inside of a chimney with cement made of cowdung and lime” と解説している<sup>24)</sup>。これを Pargiter 一族及び周囲の人々にあてはめると、それぞれの肉体の中に閉じ込められて自分のことさえ分からず、他の人と理解し合うことはなお難しい人々の間の亀裂を埋める人だと言うことができよう。

Eleanor<sup>25)</sup>こそまさに、この小説の中で *parageter* の役割を果たしている。

Eleanor がまだ22歳の若さの時に、“the soother, the maker-up of quarrels, the buffer between her [Milly] and the intensities and strifes of family life” (p. 13) と称され、彼女が現われると家族全員がほっとした。最後まで父親の世話をし、結婚しなかったかわりに、慈善活動に力を注いだ。性格的に陽気だったが、時には疲れた自分を押し殺して明るく期待された役割を演ずることもあった。彼女は吸取紙に穴のあくほど線を引きながら、自己の内面を見つめ、自分が内面と外面に分裂しているように感じたり、無になってしまうように感じることもあった。Eleanor にしても人間性に疑いを抱くことがあったが、持ち前の陽気さと心の柔軟さで自分に課せられた役割をこなすうちに、*parageter* になり得たのである。

Woolf は二つの古典を引用して、愛についての考えを要約している。「私たちは憎み合うためではなく、愛し合うために生まれてきたのだ」という *Antigone* の言葉と、「『私たちのもの』という人が多ければ多いほど、人はより幸せになる」という Dante からの一節である。いずれも、分かち合うこと、愛し合うことの大切さを訴えたものである。

Peggy は、喜びは分かち合うことによって増し、つらさは分かち合うことによって減ずることは認めるが、分かつよう要求するのは少しばかり暴力的ではないかとも考えてしまう。しかし、彼女は Eleanor と話しているうちに、そこに本当の笑い、本当の幸せがあり、崩壊しかけていてもこの世界がすべてであると受け入れるようになる。Eleanor のように人生を楽しもうと決心するのである。North は自分たちは内に自分の果実あるいは泉を持っているのだから、表面を飾ったり隠したりする必要はないと思えるほど自信がついてくる。Eleanor は、Sara と Nicholas がからかい合っているのを見て、彼らは互いに意識し合い、互いの中に生きているのだから、それは愛に他ならないと言う。North はそういう Eleanor に愛情を感じて見ていると、自分が人々みんなを好きになっていることに気付くのである。Peggy や North が素直

な気持ちになれ、愛を感じられるようになったのは、真摯で明るい Eleanor の影響とってよかろう。

V

以上見てきたように、登場人物たちは同じ言葉を繰り返し、同じ行為を繰り返す。この事実は彼ら自身にも知覚されている。繰り返しは、長い年月に亙るものであり、また何人もの人々に亙るものでもある。Eleanor には、人の顔も繰り返すように見える。Rose は40歳を越えたある日、橋の上から渦巻く川の水を眺めながら、“some buried feeling began to arrange the stream into a pattern. The pattern was painful.” (p. 173) と感じる。かつて橋の上に立ち涙を流した思い出が甦ってきたのだ。Peggy は “Each person had a certain line laid down in their minds... and along it came the same old sayings.” (p. 386) とする。

Eleanor も自分の後に人生の細長いきれが続いていると感じる。

Does everything then come over again a little differently? ... If so, is there a pattern; a theme, recurring, like music; half remembered, half foreseen? ... a gigantic pattern, momentarily perceptible? The thought gave her extreme pleasure: that there was a pattern. But who makes it? Who thinks it? (p. 398)

Woolf は構成を緊密にするために繰り返しの手法を用いたが、単に構成上の問題に止まらず主題とも大きく関わっていることが明らかになる。なぜなら、人生の終着点に向かって一直線に進んでいる人間にとって、繰り返しのパターンがあるという考えは大きな慰めになるからである。しかし、この時点で Eleanor は、そのパターンの存在を十分に信じるまでには至っていないようである。

パーティーの終わり頃、管理人の子供たちが、大人には意味のわからない騒音としか響かない歌を歌う。Eleanor はその歌をためらいながら “beautiful” と形容するのがやっとなである。Maggie も相槌を打つが、二人が同じ意味で言

っているかどうかさえ定かではない。子供たちの世代と大人たちの世代の間には越えることのできない断絶があり、Hafley が言うように社会が善と正義に向かって進化している<sup>26)</sup>と信じさせるようには作者は描いていない。

しかし、最後の場面で Eleanor は、タクシーから降りて家の中に入る若いカップルを窓から眺める。この時、Eleanor は繰り返しのパターンが、自分の死後も次の世代に順々に受け継がれ永遠に続くことを確信したにちがいない。この場面は、*The Years* のすべての手法と主題の集約であるといえる。Eleanor は感動の言葉を繰り返す。また、窓から眺めることは、50数年前、Delia と Milly が素適な結婚相手が現われないかと期待しながら、同じ窓から若い男性が馬車から降りて来るのを見つめていたことと重なる。これは、*The Years* の中で最も効果的な繰り返しのパターンと言えよう。Delia と Milly は結婚して子供を生んだ。彼女たちもこうして次の世代を生み出すことで、パターンの一部を担っているのである。また、Eleanor が手を差し伸べる相手が一番好きな Morris であることは、愛の必要性を示すものであろう。

普通の日々の繰り返しであるから、Present Day の前で *The Years* を終えても作者が描こうとしたことは描けると考える批評家<sup>27)</sup> もいるが、Present Day があるからこそ、作者の緊密な計算による繰り返しが効果を充分に発揮することができることは疑う余地もない。Eleanor の世代は老年に、Peggy や North も40歳前後の分別盛りに達し、タクシーから降りた恋人たちの若い世代、さらに管理人の子供たちの世代と幅をもたせる。時代的にもヴィクトリア朝から第一次世界大戦、1930年代のファシストの台頭まで半世紀以上を包含する。それだけの広がりがあり、変化と不変、繰り返しのパターンをより効果的に描き、事実をすべて盛り込みたいという作者の意図を実現するために必要であった。Present Day の年代を敢えて明記しなかったのは、作者の描いた繰り返しのパターンがこれからも続いていく感じを与えたかっただけではないだろう。

Woolf はこの小説の中で、登場人物たちに啓示の瞬間を与えるが、ヴィジョンの中に長く留まらせてはいない。考えがまとまらなくなったり、すぐに

疑いが頭をもたげたりする。それがこの小説にリアリティーを与えている。たとえ啓示を信じ続けることができなくても、死の恐怖に怯えることがあっても、繰り返しのパターンの一部であれば、やがて幸せな時も巡ってくるであろう。そう思えば、再び生きていく希望が湧いてくるのではなからうか。また、若いカップルの愛が象徴するように、家族や友人の間のやさしい気持も、生きていくことを大きく勇気づけてくれるのである。“The sun had risen, and the sky above the houses wore an air of extraordinary beauty, simplicity and peace.” (p. 469) で小説は幕を閉じる。折しも昇った太陽は、パターンの新たな繰り返し、そして一人の人間が死んでもまた次に生まれた者がそのパターンを繰り返していくことを示している。Woolf は最後に Eleanor が得た安らかな心境に、自らの希望を託しているように思える。

注

- 1) Virginia Woolf, *A Writer's Diary* (London: The Hogarth Press, 1975), p.189.
- 2) Mitchell A. Leaska, *The Pargiters by Virginia Woolf: The Novel-Essay Portion of The Years* (London: The Hogarth Press, 1978).
- 3) Charles G. Hoffmann, “Virginia Woolf’s Manuscript Revisions of *The Years*,” *PMLA*, 84, No. 1 (1969), 84.
- 4) 野口祐子「ヴァージニア・ウルフの『歴年』について——その統一性をみる——」『大阪府立大学紀要 (人文・社会科学)』第30巻 (1982), 111.
- 5) Beverly Ann Schlack, “Virginia Woolf’s Strategy of Scorn in *The Years* and *Three Guineas*,” *Bulletin of the New York Public Library*, 80, No. 2 (1977), 146-150; Sallie Sears, “Notes on Sexuality: *The Years* and *Three Guineas*,” *Bulletin of the New York Public Library*, 80, No. 2 (1977), 211-220.
- 6) *A Writer's Diary*, p. 239.
- 7) *Ibid.*, p. 197.
- 8) *Loc. cit.*
- 9) *Ibid.*, p. 187.
- 10) Ralph Freedman, *The Lyrical Novel: Studies in Hermann Hesse, André Gide, and Virginia Woolf* (Princeton: Princeton University Press, 1971), p. 268.
- 11) Jean Guiguet, *Virginia Woolf and Her Works* (New York and London: Harcourt Brace Jovanovich, 1976), p. 313.
- 12) *A Writer's Diary*, p. 224.
- 13) Bernard Blackstone は *The Years* においてはすべて表面的で意味がなく、でき事の間には何も関連性がないと批判しているが妥当ではない。Bernard Blackstone,

- Virginia Woolf: A Commentary* (London: The Hogarth Press, 1972), p.202 参照。
- 14) Virginia Woolf, *The Years* (London: The Hogarth Press, 1979). 以下の引用は全てこの版による。
  - 15) 坂本公延『ヴァージニア・ウルフ小説の秘密一』(東京: 研究社, 1978), p.247.
  - 16) *Ibid.*, pp.248-50.
  - 17) Woolf は婦人参政権を支持していたが、その獲得運動に携わる登場人物については共感と皮肉を交えて描いている。Dorothy Brewster, *Virginia Woolf* (New York: New York University Press, 1962), p.21 参照。
  - 18) Mitchell A. Leaska, "Virginia Woolf, the Pargeter: A Reading of *The Years*," *Bulletin of the New York Public Library*, 80, No.2 (1977), 185.
  - 19) N. C. Thakur, *The Symbolism of Virginia Woolf* (London: Oxford University Press, 1965), p.127 参照。
  - 20) 最も *Antigone* の役割を重視しているのは中島俊郎氏である。中島氏は、作者が眠ったり歌ったりしてばかりの Sara に巫子的性格を帯びさせることによって、Pargiter 家だけに止まらない普遍的な世界を構築しようとしたと述べ、*Antigone* を archetype とする *The Years* の二重構造を強調している。中島俊郎「*The Years* の二重構造」『甲南大学紀要』文学編41 (1981), 154-171 参照。
  - 21) *A Writer's Diary*, p.230.
  - 22) James Hafley, "The Affirmation of *The Years*," *Critics on Virginia Woolf* (Florida: University of Miami Press, 1970), p.105.
  - 23) David Daiches, *Virginia Woolf* (Norfolk: New Directions, 1942), p.120.
  - 24) Leaska, Introduction to *The Pargeters by Virginia Woolf*, p.xiv.
  - 25) Herbert Marder は Eleanor には "light" の意味があり、政治的・社会的崩壊の中でも全体性を得られる道を示していると解釈する。Herbert Marder, *Feminism and Art: A Study of Virginia Woolf* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1974), p.174 参照。
  - 26) Hafley, p.103.
  - 27) Daiches, p.120.